学習院大学新聞

発行所
学習院大学新聞社
〒171-8588東京都豊島区
目白1丁目5番1号
黎明会館316号室
電話 03（3986）0221内線2607
http://2nd.geocities.jp/g_press2/index.html
発行・編集人　宮下秀毅
年間500円

新中央棟堂々完成す

教育環境を整え 新時代に挑む


中央棟は旧校舎から外観の美しさを受け継ぎ、更に機能性をプラスした

今学期から、中央教育研究棟の使用が開始された。この校舎は中央教室、通称ピラミッド校舎の跡地に建てられた建物だ。中央棟は、地上12階と塔屋から成り立っている。この真新しい校舎には、従来の設備の他にも多くの新機能が付加され、その存在感を大きなものとしている。

中央教育研究棟は、南7号館と共に、本学で最新の校舎だ。高さ約50メートル、延床面積は約1万2千平方メートルで、本学敷地内では最大級の校舎でもある。取り壊された「ピラ校」を補うと同時に、更に多くの機能を付加する目的で建設された。

中央棟の南側には綺麗に整えられた樹木が植えられており、そこでは学生達が昼食を摂る姿も見受けられる。棟の1階と2階には、夏休みに学生センターの全ての部署が移設する。教務課と学生課は1階にあり、学生は今後この場所でお世話になる機会が増えるだろう。2階には学生相談室があり、専門のカウンセラーが学業から友人関係まで、幅広い相談に乗ってくれる。その他にも学生ラウンジや国際交流センターなどがあり、学生同士や留学生と様々な交流が可能となっているのだ。

授業が行われる教室は3階から5階にある。特に5階はCALL教室や演習室があるので、語学の授業などで有効活用される。6階には外国語自習室に加え、教職課程と外国語教育研究センターが併設され、学習の中心となった。

7階から11階にかけては、教員の個人研究室となっている。7階と8階は、それぞれ外国語教育研究センターと、スポーツ・健康科学センターの教員の個人研究室だ。9階は法科大学院生の専用自習室、10階と11階は法科大学院教員の個人研究室となる。

12階は同時通訳ブースを備えた国際会議場とラウンジを収容。ラウンジは学食のような飲食営業店舗が入るとされたが、その形態や運営会社は現在選定中につき未定であるそうだ。屋上階には太陽光発電パネルが設置され、出力20キロワットで日々電気を生み出し続けている。更に、1階にあるモニターで、日中に出力及び発電状況を確認出来る。環境に配慮し、時代に即した建物であり、エコが叫ばれる現在の象徴的システムと言えよう。

また、学生センターでは中央教育研究棟と、その南側の広場の愛称を募集しており、採用者には記念品を進呈する。応募の締め切りは6月19日で、詳しい内容はG-Port内で確認出来る。学生センターは「自分が付けた愛称が未来の後輩達に語り継がれていくチャンスはなかなかありません。是非応募してください」と語った。

生まれ変わる体育館 改修工事終わる


老朽化という問題を解消した大学体育館

大学体育館は昭和38年に竣工し、築47年が経過した建築物である。それだけの年月を経たことにより、建物は老朽化。屋根やサッシからの漏水があり、一部では床の高さが一定ではないとの報告もあった。それが、体育館の全面的な改良工事に至った理由である。また同時に、文部科学省の補助金を活用した、耐震補強工事も合わせて行われた。

大学体育館改修計画は、学生の使用についても考慮に入れた結果、工期の短縮を最優先とした工法を採用した。体育館の使い勝手、デザイン的な影響が内包されたものとなっている。

体育館の内部も、多くの改良が行われた。まず、外周天井とバスケットゴールが新しくなり、壁の一部を木製の板に張り替えて塗装。床はカバ材フローリングに張り替えたとのことだ。屋根は亜鉛鉄板からガルバリウム鋼板に改修することで、耐久性の向上を図った。更に、雨水の排水ルートを内樋から外樋に変更したという。

外装は窓枠をアルミサッシに改修して、外壁と鉄部の塗装を施した。設備ではシャワー室・脱衣室などのレイアウトの変更があり、衛生陶器を取り換え、内装も一新したとのことだ。

工事後の体育館では色彩も一新され、男女シャワー室他、水回りのスペースが変更となる。アースカラーを基調に、床はベージュ、壁面はアイボリーを採用している。それによって清潔感があり、明るく温かみを持たせた内装となった。体育館内部は木製の壁に合わせたブラウンを使い、扉や手すりが室内に統一感を与える仕様となっている。外装は、本学キャンパス内で統一されているホワイト塗装でまとめられた。

新しく生まれ変わった大学体育館。老朽化の問題も解消され、存分に活用することが出来るだろう。長く、大切に利用したいところだ。

紙面紹介

2 日本人の食卓事情

私達が日頃口にしている食事のルーツは何だろうか。毎日の食生活を振り返り、近代から今に至るまでの経緯を知ろう。

3 実は知らない お酒の基本

4 横国大に競り勝つ 卓球部男子

学習院 研究最前線

学問研究の「いま」

「比較の視点から見えてくること」

法学部政治学科　野中 尚人教授

PROFILE
84年東京大学文学部卒業。93年同大学大学院総合文化研究科国際関係論専攻博士課程修了、博士（学術）の学位を取得。96年より現職。

◇　◇　◇

先生は、比較政治学を用いて、戦後日本に出来た政治の仕組み、統治の仕組みを研究されています。今回はその中で内閣の仕組みについてお話を伺いました。

（取材・構成　高橋弘一）

内閣制度の比較研究

内閣の仕組み

イギリスや日本などの議院内閣制の国家において、国の行政権を担当する内閣。先生は初めに、内閣とはどのような組織なのかについて語る。

「内閣は本来、主として政治的な統合機関、意思決定機関であり、リーダーシップのための組織です。また、国会議員が選挙で約束したことを実行するための司令塔なのです。故に、行政の仕組みに上手く乗りながら様々なことを統括する仕事をしないといけません」

しかし日本では、内閣が行政の各部署の様々な利害を追認する仕組みになってきてしまった面があるという。更に日本の場合、政府の最高意思決定機関である「閣議」が、非常に形骸化していることが問題なのだと指摘する。

「閣議の前には各省の省議があり、その前に各局の中で調整がされていて、場合によってはそれぞれの段階で、役所同士が調整をします。しかも、以前は閣議の前日に事務次官等会議が行われていました。そういった一連のプロセスが存在し、その上に閣議が乗っかる形になっているので、行政の意見が通りやすい内閣・閣議の運営がされてきたのです」

他国との比較

そこで、他国と比較してみることが有効となる。そうして見ると、他国は閣議をそれ単体で運用するのではなく、内閣のシステムとして運用するのだそうだ。

「ほとんどの議院内閣制の国は、閣議の下に少数の閣僚による閣僚委員会というものを配置する形で分業をしています。そこで実質的な議論を行い意思決定を組織化して、政治家が色々なことを決められるようにしています。どこの国も程度の差はあれ、そういうストラクチャーを導入しているのですよ。更に、その中で各国が事情に応じて微調整をするという形になっているのです」

ところが日本は、閣議が形骸化しているので、政治的なリーダーシップを取ることが出来ない。自民党政権時代はひたすらその制度を変えずに運用してきたのだが、時代や環境の変化に対応出来ず、上手く行かなくなってしまったという。

「自民党も、これまで彼らを支えてきた官僚自身も、自分達が築き上げてきた戦後の仕組みが、どうして今まで通り回らなくなったのか分からなかったのです。また、それを変えるにはどういった代案を持って行けば良いかということが、見えてなかったのですよ。だから比較研究をすることによって、その構造をどのように修正すべきかを検討しています」

学生へ向けてのメッセージ

学生のポテンシャルをどうやって引き出せるかを、いつも考えているという先生は、学生に向けて助言をしてくれた。

先生曰く、人生は1回しかないので、自分が面白いと思えることを見付けられるかどうかが極めて重要であるそうだ。

「社会人としてどういう仕事を選び、どういう分野に打ち込んでいくかを、自分でしっかり見極めてください。その上で自分が本当にやりたいこと、本当に好きなことを見付けるのが、すごく大事だと思います。これは難しいことですが、自分が納得出来るような気に入ったものを探して、それに取り組んでほしいです。それが出来るだけ仕事と重なった方が良いし、これなら自分がやっていけるというものを見付けないと、就職しても長続きしないと思いますよ」

野中教授は、研究と並行しながら「新しい日本をつくる国民会議（21世紀臨調）」に参加している。そして、現在日本が抱えている問題を包括的に議論して、積極的な提言を続けているそうだ。先生の活動は止まる所を知らない。

後春の風に乗る音楽

セミの鳴き声が聞こえてきそうな５月下旬、それは始まった。毎年恒例の音楽イベント、目白音楽祭（通称・めじおん）である。音楽関係の部活やサークルが集まるこの催しは、じめじめとした湿気を吹き飛ばし、学生達の足を止めていた。大勢の聴衆がステージを取り囲み、次第に熱気を帯びながら盛大に活気付いていく。そんな中で、この音楽祭の主役達はこの日を待ち焦がれていたためであろうか、皆、活力に満ち溢れている様子であった。

各グループは手際良く行動し、今すぐに始めたいという気迫が伝わってくる。そんな彼らは、軽快なリズムに乗りつつ体を揺らし、１曲１曲を真剣な顔で取り組んでいた。薫る風が吹き抜ける演奏会は盛況の中、幕を閉じた。

（徳）

完全勝利狙う 甲南戦開会式

4月24日、第55回学習院大学対甲南大学運動競技総合定期戦（以下、甲南戦）の開会式が、本学にて行われた。初めに開会の辞の後、甲南大学体育会本部委員長が優勝杯を返還する。

次に両校の学長を始め、本学学生センター所長、甲南大学学生部長、本学スポーツ・健康科学センター所長が健闘を祈った。そして本学運動部常任委員会甲南戦実行委員長、甲南大学体育会本部委員長が挨拶をし、それぞれ校歌を斉唱する。閉会の辞で幕を閉じ、終了後にはレセプションが開かれ、両校が親睦を深めた。

今回の甲南戦について、永田圭運動部常任委員会甲南戦実行委員長に意気込みを聞いた。「本学は毎年大差で負けてしまっており、ここ十数年勝利を収めていません。今年度は更に一丸となって優勝を見据え、両校良い試合を展開していけるよう、盛り上げていきたいですね」と、尽力する姿勢を見せる。

また、本学・成蹊大・成城大・武蔵大が競い合う四大学運動競技大会（以下、四大戦）が、10月15日から3日間開催される。今年度で第61回目を迎え、当番校は本学だ。これについて永田実行委員長は「今年度は甲南戦、四大戦共に本学で行われる珍しい年であるため、一段と士気を高めていきたいですね。今年度は完全優勝を目指します」とコメントした。本学は四大戦で6連覇を果たしている。更なる栄光を掴むべく、甲南戦、四大戦での優勝に期待が懸かる。

素朴な疑問

森の奥の石碑の謎

6月に入り、新緑が目に眩しい初夏を感じさせる日々が続く。そんな日には、緑溢れる学内を巡ってみるのが良いだろう。普段足を運ばない場所で、新たな発見があるに違いない。その中には、どうしてこのようなものが存在しているのか、不思議に思うものもある。

血洗いの池から少し離れた所に、ぽつんと小さな碑が佇む。その名も鳩魂碑。学内には多くの石碑があるが、それらの詳細は余り知られていない。鳩魂碑もその中の1つだ。何故、この石碑は作られたのか。真相は次の通りである。

昭和6年に、陸軍からフランス製大型鳩舎と鳩20羽余が贈呈されたのをきっかけに、本学に伝書鳩研究会が発足した。後に、研究会は軍用鳩部へと改称したが、空襲により鳩舎が消失したことで、終戦と共に部は廃止となる。鳩魂碑は、亡くなった約300羽の鳩を供養するために作られたという。

暖かな木洩れ日の中、緑の下で静かに眠る鳩達。学内散策の際には、少し足を伸ばして、この碑に来てほしい。そして彼らに思いを馳せ、安らかな永遠の眠りを祈ろう。

（森）

明窓浄机

私は、中高時代からずっと音楽を習い続けている。そこから、音楽は私の生活の中心である。レッスンに通ってから何年かは、色々なことが出来るようになるのが嬉しくて、時間が許す限り練習をした。そして、頭の中を大好きな音楽で埋め尽くす。そんな日々は私をとても幸せにしてくれた。1つずつ壁を乗り越えた時の楽しさが、私をどんどん音楽の世界へ引き込んでいく▼しかし、しばらくすると、要求されるレベルに応えられない実力のなさが苦痛になっていった。その時、楽しさしか見えなかった音楽に、違うものが沢山浮かび上がっていった。更に、嫌なことや面倒なことに過敏に反応するようにさえなってしまう。だがその中でも、何度も失敗していたことがやっと成功した時の喜びは、湧き上がるように体中を駆け巡る。そこには今までのものより深い喜びが存在した▼苦しさに向き合うからこそ、その壁を自力で乗り越えた時に本物の楽しさを実感する。私は音楽を通して、どれだけの苦労をしても、その分だけ収穫があるのだ、と思えるようになったのだ。こうして、私に大事なことを教えてくれた音楽とは、今後も付き合い続けるだろう。この大切な楽しさに胸を張れるような自分であるために、努力を厭わずにいたい。また音楽の魔法に出会うために、全力で音を奏でていこう。（鯛）

月刊少年ミヤシタ

毎年恒例の新歓合宿。今年は箱根・芦ノ湖へ赴いた。この合宿を通して、普段の編集作業とは違った、社員達の新たな一面を見ることが出来た。彼らの全てを受け止めて、残り1号、頑張っていこう。（雷）

情報特急便

第9回キャリアアップセミナー ベーシックスキルアップ講座（第2回）
日時：6月2日（水）午後6時～
場所：西5号館B1教室
講師：外部講師
備考：1～3年生・M1年生対象

第2回就職セミナー インターンシップ講座（第2回）
日時：6月4日（金）午後6時～
場所：西5号館B1教室
講師：外部講師
備考：インターンシップ参加希望者対象

東洋文化講座シリーズ　第74回「日韓併呑の桎梏史から生まれた交流の事例から未来を考える」
日時：6月4日（金）午後6時～
場所：西2号館501教室
講師：李修京氏（東京学芸大学准教授）
備考：参加自由・無料

第3回就職セミナー 自己分析講座（第3回・第4回）
日時：6月7日（月）・15日（火）午後6時～
場所：西5号館B1教室
講師：外部講師
備考：3年生・M1年生対象

東洋文化講座シリーズ　第75回「朝鮮半島情勢の新展開と国際社会」
日時：6月11日（金）午後6時～
場所：西2号館501教室
講師：菱木一美氏（広島修道大学名誉教授）
備考：参加自由・無料

東洋文化講座シリーズ　第76回「日韓の人的交流と相互認識」
日時：6月25日（金）午後6時～
場所：西2号館501教室
講師：小針進氏（静岡県立大学教授）
備考：参加自由・無料

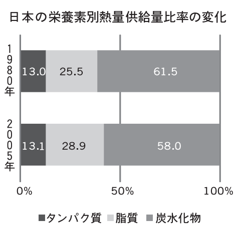
食生活

伝統食の秘密とは

今、私達の周りには、パスタなどを代表とした外国食が溢れている。その反面、日本食の存在は薄くなってきているようだ。そんな時代だからこそ、今号で日本が持っている食文化の大切さを見直してほしい。

食の多様化が進む現在、私達は気軽に様々な国の料理を楽しむことが出来るようになった。しかし食のグローバル化が進む一方で、従来の伝統的な日本食を軽視しがちになっているのではないだろうか。そこで今回は、私達の食文化の変遷と併せつつ、日本食を考え直してみたい。

まず初めに、新聞やテレビ番組などで時々耳にする「日本型食生活」とは何だろうか。この言葉が用いられるようになったのは、昭和50年代のことである。当時、政府諮問機関の農政審議会が、優れた栄養バランスを持つ日本の食事を定着させる目的で提言をした。以後この言葉は広まり、各所で用いられるようになった。審議会の報告書にある定義をまとめると、第1に欧米諸国に比べカロリー水準が低い。次に、摂取したカロリーに含まれるでんぷん質が高く、栄養バランスが優れている。最後に、動物性タンパク質と植物性タンパク質が均等に摂れる。以上3つが特徴として挙げられていた。



さて、この食事形式が生まれた背景には、我が国伝統の「一汁三菜」が関係しているだろう。江戸時代の本膳料理が簡素化されて生まれたこの形式は、現在の家庭料理の基本となっている。この献立を構成するのは、米を中心に汁物とおかずの主菜1品、副菜2品を合わせた3品だ。これを基に食事をすることで、エネルギー源となる炭水化物を中心に、おかずで他の栄養素を充分に摂取出来る。また、ご飯は他の食物と併せて食べることで、消化と吸収の効率を上げることが期待出来るそうだ。

加えて、日本食には風土も関係しているだろう。その観点から見てみたい。我が国は四方を海で囲まれている島国である。そのため、古くから食卓には魚介類が並んでいた。また、国土の7割以上を山地が占めているため、山の幸も多く、食材に富んでいると言える。そして、四季に分かれた穏やかな気候は、畑で多種多様な作物の栽培を可能にした。時節ごとに収穫された野菜は、食事に彩りを与える。以上の理由から、和食には季節感のあるメニューが多いのだろう。それらは食材の持つ味を活かすため、シンプルな調理法によって作られることが多い。

豊かな食材を得られる環境にある我が国。それ故、他国に比べてより多い品目を一度の食事で摂取することが出来る。このことも日本人の健康の秘訣と言えるだろう。

戦後以降、食の欧米化が進み、我が国の食生活は大きく変わった。その結果、食が乱れ、肥満になる人や生活習慣病などに罹る人が急増し、一種の社会問題となっている。なかなか気に留めない自らの食生活。今一度、見つめ直す必要がありそうだ。（伊藤友喜）

和から洋の食卓へ

古来から続く日本の食文化は、戦後以降大きく変わり、現在に至っている。これは、アメリカ政策の影響を強く受けたことが原因として挙げられている。ここでは、その具体的な経緯を解説していく。

約250年のアメリカの歴史の中で、農業の黎明期は1870年頃であったと考えられている。この時代には荒野に鉄道が敷かれ、その沿線に農家を入植させ、その農産物を貨物として輸送していた。更に諸外国からも入植者を募り、多くの外国人移住者を招き入れた。この政策により、戦前から小麦などの大量の農産物を生産出来るようになる。それらを外国に輸出していたため「世界のパン籠」とも言われていた。アメリカの広大で肥沃な農地がこれを可能にしたのだ。

1900年代、すなわち戦争の時代に突入すると、米国は各国に兵糧として大量の作物を輸出し、経済の柱としていく。しかし第2次世界大戦が終結すると、農産物の需要は極端に減っていき、過剰生産、過剰在庫が深刻な事態となる。1939年に政府は、小麦を余剰生産物として輸出し始める。しかし、当時はほとんどの国が農業国だったので、輸出先を見付けることが難しかった。よって、早急に策を講じ、余った農産物の受け入れ国を探す必要に迫られる。そこでアメリカは、大戦で甚大な被害を受けたヨーロッパ諸国に経済・食糧援助を行った。1954年に議会で余剰農産物処理法が制定され、発展途上国を中心とした輸出促進策を打ち出す。この最大の標的になったのが日本であり、それまでの食生活を欧米型に転換させようとした。これを一般に「アメリカ小麦戦略」という。朝鮮戦争が終焉に向かう中、日本は経済復興を考える時期に面していたため、これを承諾。日本は当時まだ米が主食であったが、米国がパン食普及の事業推進のために資金提供を行った。これにより徐々に、小麦を原料としたパン食が普及していったのだ。そして、食生活の欧米化は急速に進んでいく。その活動の中心となったのが、現在まで続く学校給食である。


栄養改善運動の一環で粉食を広めるキッチンカー

学校給食は、アメリカから受け入れた小麦を国内で消費するための手段であった。厚生省が粉食奨励を栄養改善運動の柱として掲げ、パンとミルクによる給食を定着させようと活動したのだ。また、米国は給食による主食の変化に併せ、おかずの欧米化も期待していた。日本の食生活が変化すれば、食材を提供している自国が益々豊かになるからである。更に、先の運動の一環として、キッチンカーが日本全国を巡回した。この車は大型バスを改良し、調理台・ガスレンジ・食器類・冷蔵庫・プロパンガスなどを搭載している。加えて、放送設備も積み込み、野外での活動も出来る。この車でスパゲッティーやシチューなどの料理講習会を開催したり、パン産業の育成などを行ったのだ。目的は更なる小麦の消費拡大で、必要経費は全てアメリカが負担した。但し経済援助の条件として、キッチンカーで作る料理は、小麦か大豆製品を使用するという制約を設けている。結果的にこの運動は4年間で2万箇所、参加者は200万人を超えた。

日本はアメリカの余剰農作物の販路として多くの生産物を受け入れ、この影響を大きく受けながら、現在に至っている。そのため、食料自給率は低下し、日本の食生活のスタイルは完全に方向転換したと言えるだろう。（山田晃）

栄養素の補い方

本学の近隣にはファストフード店やコンビニ、牛丼屋が揃っている。その商品の多くは、必ずしも体に良いとは言い難い。そこで、共立女子短期大学生活科学科の黒澤美智子教授に上手な利用法を伺った。

まず、安くてボリュームのある牛丼については「お肉の量が少ないという意見もあるようですが、お肉は足りています。ただ、野菜が不足しているので、サイドメニューにある漬物や生野菜を頼んだ方が良いでしょう。それと、お肉は動物性タンパク質なので、植物性タンパク質も併せて摂取出来ると理想的です」と仰っていた。冷奴や納豆などの1品を加えると、よりバランスが取れるようである。また「大豆製品を食べる時は、手軽な青のりでも良いので、海藻類と組み合わせることを意識してください。大豆に不足しがちな必須アミノ酸を、海藻が補ってくれます」と付け加えた。更に、丼物などを単体で食べる時には、理想的なアミノ酸のバランスを持つ卵も添えた方が良いとのことであった。

次に、何かとキャンペーンを行い、私達の購買意欲を刺激するファストフードはどうなのであろうか。「やはり、高脂質・高カロリーなのが問題ですね。後は、ビタミンとミネラルの欠如です」。ハンバーガーには、セットメニューとして決められた型があり、牛丼のサイドメニュー程の自由度はない。だが「それならば飲み物を、オレンジジュースや牛乳などにして不足分を補ってください。噛むように飲むと唾液と混ざり、その消化吸収が促されます」と、面白い改善策を教えてくださった。1日のビタミンバランスを整えるために、ミカンなどの果物を食べるよう心掛けることが必要だろう。

今は、セットにサラダを組み込める店も多い。牛丼屋やファストフードの商品でも、食べ合わせによっては私達の体に必要な栄養素を補うことが出来るのだ。


食事の改善方法を提案する黒澤教授

しかし「エネルギーの3分の2は、でんぷん質で摂るのが望ましいのです。ですから、お米を主食としてもっと大切にしてください」と黒澤教授は語る。

では、より身近なコンビニ弁当を買う際には、何に気を付ければ良いのだろうか。「市販のお弁当は高カロリーの割に、栄養素の種類が少ないのが特徴です」。そして「添加物が多く入っていますし、食材にも輸入品がよく利用されています。輸入食材は、使用された農薬の種類や量が分かりづらいので注意が必要です」と、様々な問題点があるようだ。添加物は複数の製品を同時に食べることで、人体に無害な量を超えてしまうことも考えられる。また、2種類以上の摂取によって相互作用が起きる可能性もある。それらは体内の色々な組織に負担を掛けるため、将来的に影響が大きいのだ。

「おにぎりなども、添加物を入れないで販売することは難しいのです。ですから、おにぎりと、野菜不足を補う漬物などは自分で作って来ましょう。きゅうりやキャベツは夜の内に軽く塩漬けしておけば、翌朝には食べられますから」。コンビニ弁当をメインとするのではなく、おかずを補う程度で利用した方が良いだろう。加えて「決まった物ばかりを食べるのも、栄養が偏る大きな要因です。ですから、様々な食材が摂れるよう、数人で集まって買ったものをシェアしてみてください」と、楽しそうな昼食の場面が思い浮かぶ御意見を頂いた。

飽食の時代だからこそ、食について自分で考え、選択することが大きな意味を持つ世の中となった。インターネットなどで「食事診断結果」と検索すると、自分の食生活の良し悪しが分かるサイトもある。食べ過ぎた日などに開いて、次の日の食事の参考にしてほしい。（福田美緒）

種類豊富な学生の食卓

小中学校において、楽しみな時間と言えば給食だろう。毎日献立表の前で心弾ませていた人も多いのではないだろうか。給食制度は日本だけでなく、海外でも実施されているようだ。そこで、海外の給食はどのような現状であるのか探りたい。

まず、美食国家フランスの給食を取り上げよう。この国では、調理長や学校医も一緒に協力して献立を考える。これにより、栄養バランスを多角的な視点で考えることが可能となっているのだ。そのような目線で作られたメニューは、正式なコース料理と同じように、前菜からデザートまで出される。これは、自国の料理に誇りを持っているフランスらしい工夫と言える。幼少期からの教育こそ、作法を身に付けた大人になる重要な道であるだろう。

次に、世界の大国アメリカ。制度内容は地区によって異なるが、全体の目的は、バランスの取れた栄養を学生達に充分に摂取させることである。しかし、給食を食べるかは選択制で、ランチボックスを持参する生徒も多い。これは、日本の学食風景に近いだろう。メニューを見てみると、ハンバーガーなどに、栄養バランスを考え温野菜や果物などが付いているようだ。アメリカの食事と言えば高カロリーの印象があるだろうが、実際は栄養についても考えられている。だが、給食を食育の場と捉えていないため、教師による介入はなく、食に対する教育は、個人に委ねられている。

最後にお隣の国、韓国を見てみよう。当国は他の国と比べて給食の歴史は浅く、まだ数年前に施行されたばかりだ。そのため、使節団が訪日し、制度を学んでいくということもあった。このように他国を参考にしつつも、独自の品も盛り込まれている。例えば、毎日キムチが出たり、伝統料理であるトッポギが献立に登場したりする（写真参照）。制度開始から日が短いため、今後の発展が楽しみだ。

以上のように、各国の給食は子供達に更なる食べる楽しみを与えようと、メニュー作りに試行錯誤している。どの国も母国の食文化を身近に感じてもらうために、努力しているようであった。それは、子供の食への関心を高めたいという大人達の願いの表れでもあるのだ。皆さんも、幼い頃の給食の思い出を振り返ってみてはいかがだろうか。（緒方花穂里）

記者の眼

SFと現実世界の交差

村上春樹の『1Q84』に触発されただろうか、昨年の9月に『1984年』が新たに翻訳された。本書はイギリスの作家、ジョージ・オーウェルの著書で、1948年に出版された名作SF小説である。タイトルは、刊行された年号をアナグラムにして付けられた。

作品のあらすじは以下の通りだ。舞台となるのは架空の1984年で「偉大な兄弟」と呼ばれる独裁者を頂点にした1つの党が、国民の生活のあらゆる部分を支配している。驚くべきことに、その範疇は思想や言語から結婚にまで及んでいた。しかし、党の徹底した監視下におけるコントロールによって、その支配に疑問を抱く者はいない。そのような閉塞した社会を息苦しく感じていた1人の男が、党の圧政に抗う姿を描いたのがこの小説である。「偉大な兄弟」と党が支配する世界は、スターリン政権下のソビエト連邦をモデルに描かれており、冷戦初期やソ連崩壊後にも非常に注目を浴びた作品だ。

だが、現代にも通じる1つの重要なキーワードが存在する。それは、歴史や情報の改竄だ。小説内では日常的に過去は作り変えられており、それは新聞・雑誌・ラジオと多岐に渡っている。それらは全て「偉大な兄弟」と党にとって都合の良いように捏造され、過去の真実は故意に葬り去られているのだ。モデルとなったソ連では、冷戦が始まるとプロパガンダのために偽りのデータを基にした資料を使って、自国が経済的に米国を追い抜くことが可能であると多くの人々に信じ込ませていた。しかし実際にはソ連経済は停滞しており、70年代半ばには西ドイツや日本にも経済的に対抗出来なくなっていたのである。

身近になった情報改変…日本では

こういった事象が現代日本で発生することを懸念する人は少ないだろう。だが、オーウェルの作品を通して考え直すと、一抹の不安を覚える。例えば、近年は作業の簡便化や情報を集める際の利便性を求めて、国勢調査やその他の統計の電子化が進んでいる。中には書籍化を廃止して、インターネット上にのみ掲載されるものも増えてきた。非常に便利になったが、忘れてはならないことがある。それは、保存媒体の変化によってデータを削除し、意図的に書き換えたものを挙げ直せるのが技術的に容易になってしまった点だ。『1984年』の中では、多くの人を動員し、長い時間を掛けて手作業で過去の歴史を次々と改変していった。しかし現在の技術は、たった1人の人間による歴史の作り変えを可能としている。現在のテクノロジーは、SF作家の想像よりも遥かに進んでしまっているのだ。

現代の日本では、過去が捻じ曲げられる危険性を感じるのは確かに難しい。だがそれが、充分な可能性を持っているのは事実だ。便利さを享受すると共に、常に懐疑の眼を光らせる必要が生じたと言えるだろう。そして日本だけでなく、関係の深い国々にもその視線を向けるべきだ。国はもはや、1国だけで成り立っているのではないのだから。（経済学科3年　小畑裕輝）

Tell Me! 偉人 白洲次郎

Lesson 8

揺るがぬ屈強な信念

戦後のアメリカ占領下の日本に、米人に臆することなく意見し、彼らに「従順ならざる唯一の日本人」と言わしめた男がいた。白洲次郎、その人である。次郎は堪能な語学力を活かし、吉田茂の傍で日本国憲法の制定作業や通商産業省の創設など、多大な功績を残す。国の体制が整うと、彼は地位に固執せずに実業家として経済の立て直しに尽力した。

精力的に日本の復興に寄与した次郎には、様々な逸話がある。例えば、緒戦優勢で国内が狂喜していた時のこと。彼は、周りの人々と共に浮かれることはなかった。冷静に日米の国力の差によって日本が劣勢を強いられる状況を見据え、食料難や空襲の危機に備えて疎開した。その地で百姓として過ごし、難を逃れたのである。

特筆すべきは、合点が行かない話には相手が誰であろうと一歩も譲らなかった次郎の姿勢だ。その行動の根底には、戦争には負けたが奴隷になった訳ではないという思いがあった。吉田内閣がサンフランシスコ平和条約の受諾演説を行う際、首相は米国側と打ち合わせ済みの英文の原稿を用意していたが、次郎は独立国家としての誇りを持つべきだと憤る。そこで急遽、和紙に筆で記載した日本語のものに作り変えさせたのだ。このような態度は、彼が重んじた信条という意味合いの「プリンシプル」に基づく行為だった。敗戦で国民が卑屈になる中でも、決意を曲げない彼の精神には感心させられる。

周囲に流されることなく、己の信ずる道を突き進んだ次郎。その筋の通し方は、決して妥協を許さない熱いものだった。我々も、彼のように堅固たる意志を持って人生を歩みたいものである。（加藤絵梨香）

編集後記

私達の体を作る食事。重要だが、懐具合に左右されがちな大学生の昼食のために、本特集を組んだ。

白米にわかめと豆腐の味噌汁。そして漬物と焼き魚というパターンは、日本の典型的な食事だ。何故この4品なのか、その理由が今なら分かるであろう。このような組み合わせを考えた先人の知恵は、偉大なものである。それらは、私達の祖父母や両親の中に息づいているはずだ。だからこそ、家族と共に食事をすることで学ぶものは、数え切れない。「日本らしい食の知識を大切に受け継いでいこう」。そう感じた編集作業であった。（福田美緒）

企画　福田美緒
構成　菊岡真衣
レイアウト　伊藤友喜
取材　飯村渉
緒方花穂里
加藤絵梨香
山田晃

お酒と楽しく付き合おう

20歳を迎えると、サークルの打ち上げや友人同士でお酒を飲む機会が増えることだろう。そこで今回は、上手にお酒と付き合い飲酒を楽しめるように、知識を深めていこう！

気になる学生の飲酒習慣

大学生は、飲酒する機会が出来、お酒を身近に感じるようになる人も多いはずだ。そこで、20歳以上の本学学生を対象に、お酒に関するアンケートを実施した。その結果から、学生のお酒事情に迫ってみよう。

まず、お酒はお好きですかという問いに対し、男性84%・女性86%が「好き」と回答し、全体としては85%に及んだ。ここから、いかにお酒が大学生に親しまれているかが分かる。理由としては「楽しい」や「リラックス出来る」という意見が多く見られた。また、酔うことで気分が解放されるなどの、支持される要因として以来、友人と上手く打ち解けられずにいた、そんな彼女に、とっ同田と石井さんの信頼関係は、憧れであった。思春期の複雑な気持ちが、彼女を通して事細かに描かれている。

岡田と石井さんの間には、新たな感情が芽生えていく。しかし、互いの多忙な毎日から疎遠になってしまう。更に、彼女に展開していくのか――。

本作では石井さんとの再会から、彼女に強く惹かれていく岡田の心情が、中学時代の記憶と共に色鮮やかに描かれている。相手を想う気持ち、東京を離れる彼女を忘れられず葛藤する岡田の姿が見所だ。

何気なく交わされていた言葉や、誰にも相談出来ずに悩みを過ごした日々も、振り返れば淡い思い出として刻まれている。岡田と石井さんのやりとりに、共感する読者も多いはずだ。自身の過去に重ねつつ、読んでほしい。（月）

（中村航著　角川書店　税込470円　2000年）

あのとき始まったことのすべて

『あのとき始まったことのすべて』は、東京に勤務する岡田が、中学の同級生である井さんと10年振りに再会するところから始まる。元々大阪の本社に勤めていた彼女は、現在は東京の支社にいるという。中学生の頃は他愛ない話で盛り上がった2人だが、卒業しからは一度も連絡を取らずにいた。

だが、会えばすぐに中学時代の調子に戻り、思い出話に花を咲かせた。修学旅行で出会ったお部屋をする部屋や、給食に群がる歌や懐かしい日々が次々と蘇る。そして岡田は、当時クラスメイトだった同級生に密かな想いを寄せていたことを打ち明ける。

修学旅行で彼らと行動を共にした同級生は、過去にいじめを受けて以来、友人と上手く打ち解けられずにいた、そんな彼女に、とっ同田と石井さんの信頼関係は、憧れであった。思春期の複雑な気持ちが、彼女を通して事細かに描かれている。

岡田と石井さんの間には、新たな感情が芽生えていく。しかし、互いの多忙な毎日から疎遠になってしまう。更に、彼女に展開していくのか――。

本作では石井さんとの再会から、彼女に強く惹かれていく岡田の心情が、中学時代の記憶と共に色鮮やかに描かれている。相手を想う気持ち、東京を離れる彼女を忘れられず葛藤する岡田の姿が見所だ。

何気なく交わされていた言葉や、誰にも相談出来ずに悩みを過ごした日々も、振り返れば淡い思い出として刻まれている。岡田と石井さんのやりとりに、共感する読者も多いはずだ。自身の過去に重ねつつ、読んでほしい。（月）

（中村航著　角川書店　税込470円　2000年）

級友との恋の結末は

読書

お家でまどろもう

～お家で作れる果実酒レシピ～

◆苺の果実酒◆

材料：苺　100g（中3個分）
ブランデー　150ml
グラニュー糖　20g

梅酒やあんず酒など、甘い口溶けで私達を酔わせてくれる果実酒。その口当たりの良さに魅了され、居酒屋へ行くと人気の商品だが、実は自宅で手軽に作ることが出来る。今回は、可愛らしい苺の果実酒レシピを紹介する。

作り方は至って簡単だ。まず、苺を水洗いし、ヘタを取り除く。次に、ブランデーを容器に移し、そこへグラニュー糖を入れ、粒が溶けるまで混ぜておく。そこから、実際に漬け込む瓶を用意する。容器は、しっかりと密閉出来るタイプのものにする事。更に、中身が見えるように間口が広い瓶などが最適だ。瓶の底に苺を入れ、閉める。これで作業は完了だ。

後は、果実酒が熟成するのを待つのみである。保存場所は、直射日光が射さない暗な所が望ましい。小瓶では最長で1年は保つが、手軽な苺酒は2日目から楽しめる。もちろん、それ以降も漬け続ければ、より深い味わいが引き出せる。しかし、次第に果物から独特の濁りが出てくるようになるので、出来上がりの見た目が気になる人は、2週間が経過した頃に苺を取り出すことをお勧めしたい。

今回は、2日間寝かせたものを試飲する。実は自宅で手軽に苺を取り出すことを勧めたい。

適量とされている条件は多くあるが、医学的な効能を認めるのは、「週に1、2回、適量の赤ワインを飲むと、心臓病の発症率が低くなる」という研究結果だ。

ワインの原料となるブドウの種子や皮には、ポリフェノールの一種であるレスベラトロールが含まれている。これは、血管内皮細胞の保護や、血小板の凝集を防ぐのですって。適量であれば、動脈硬化と血小板の凝集を防ぐ作用があるのだ。

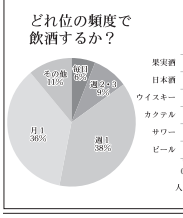
ただ、「適量」とは、どのくらいなのか？　この問いに対し、ある専門家は「1日に1杯程度」と答えている。

ワインの種類によっては、ポリフェノールの含有量が異なるため、一概に「何杯飲めばよい」とは言えないのである。

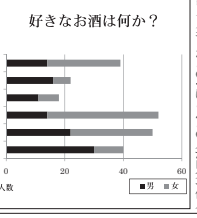
ワインの効能を説く古屋氏

アンケート結果

どれ位の頻度で飲酒するか？



好きなお酒は何か？



気になる学生の飲酒習慣

大学生は、飲酒する機会が出来、お酒を身近に感じるようになる人も多いはずだ。そこで、20歳以上の本学学生を対象に、お酒に関するアンケートを実施した。その結果から、学生のお酒事情に迫ってみよう。

まず、お酒はお好きですかという問いに対し、男性84%・女性86%が「好き」と回答し、全体としては85%に及んだ。ここから、いかにお酒が大学生に親しまれているかが分かる。理由としては「楽しい」や「リラックス出来る」という意見が多く見られた。また、酔うことで気分が解放されるなどの、支持される要因として以来、友人と上手く打ち解けられずにいた、そんな彼女に、とっ同田と石井さんの信頼関係は、憧れであった。思春期の複雑な気持ちが、彼女を通して事細かに描かれている。

岡田と石井さんの間には、新たな感情が芽生えていく。しかし、互いの多忙な毎日から疎遠になってしまう。更に、彼女に展開していくのか――。

本作では石井さんとの再会から、彼女に強く惹かれていく岡田の心情が、中学時代の記憶と共に色鮮やかに描かれている。相手を想う気持ち、東京を離れる彼女を忘れられず葛藤する岡田の姿が見所だ。

何気なく交わされていた言葉や、誰にも相談出来ずに悩みを過ごした日々も、振り返れば淡い思い出として刻まれている。岡田と石井さんのやりとりに、共感する読者も多いはずだ。自身の過去に重ねつつ、読んでほしい。（月）

（中村航著　角川書店　税込470円　2000年）

醉いの仕組みを科学する

お酒を飲んでほろ酔い気分になることも、飲酒の楽しみの一つではないだろうか。ただ、この「酔い」はどのようにして引き起こされるだろうか。

今、あなたがお酒を飲んでいるとしよう。飲んだアルコールは食道を通って胃に送られる。ここで、「酔い」が感じられる。

胃に送られたアルコールは、一部は胃の粘膜から吸収されるが、大部分は小腸に送られ、ここで80%が吸収される。吸収されたものは血管に溶け込んで、肝臓へと行き着く。肝臓はアルコールを分解し始めるが、分解の速度は非常に遅い。大部分は血管を伝って身体に行き渡り、大脳に到達する。そして、アルコールは脳を麻痺させ、あなたは「酔った」と感じるのだ。更にお酒を飲み続けると、血中のアルコール濃度が上昇し、脳内の様々な組織が麻痺していくことが「酔い」が回るという状態である。

さて、一口で酔いと言っても、様々な段階が存在している。最初に現れるのは「ほろ酔い」の段階だ。気分が良くなり、リラックスした状態である。

更に、アルコールはすぐアルコール中毒になりやすいためである。よく言われるように、節度を守ることが肝心なのだ。

（大久保吉章）

「酔いの4段階」

ほろ酔い
↓
酩酊
↓
泥酔
↓
昏睡

お酒って体に良いの？

以上より、飲酒の危険な面を理解頂けただろうか。この話題の中で、「お酒の優れた面を中心に捉えていこう。今回は、社団法人アルコール健康医学協会の、古屋賢隆氏にお話を伺った。

初めに「酒は薬」という言葉があるが、本当に お酒は人間の良きパートナーになり得るのだろうか。古屋氏によると「お酒は血圧を下げ、利尿作用を促進します。更に、血液内の善玉コレステロールを増やすので、動脈硬化と血小板の凝集を防ぐのですって。適量であれば、医学的な効能を認めるのの。医学的な効能を認めるのの。このうの作用よりも「実際に、飲酒を全くしない人に比べて、少量を飲んでいる人の方が長生きするというデータもあります」と話す。

また、適度な飲酒は眠前を理解頂けただろうか。

ここからは、「楽しい」お酒の優れた面を中心に捉えていこう。今回は、社団法人アルコール健康医学協会の、古屋賢隆氏にお話を伺った。

初めに「酒は薬」という言葉があるが、本当に お酒は人間の良きパートナーになり得るのだろうか。古屋氏によると「お酒は血圧を下げ、利尿作用を促進します。更に、血液内の善玉コレステロールを増やすので、動脈硬化と血小板の凝集を防ぐのですって。適量であれば、医学的な効能を認めるのの。医学的な効能を認めるのの。このうの作用よりも「実際に、飲酒を全くしない人に比べて、少量を飲んでいる人の方が長生きするというデータもあります」と話す。

また、適度な飲酒は眠前にも効果的だ。睡眠の前半部分に大きな非常に深い眠りが、つまりノンレム睡眠を増加させることが分かっている。今、適度な飲酒は、ストレスを解消するのである。

さて、適度に飲酒は楽しいお酒だが、飲み過ぎてしまうと、快感を伴うこともあるかもしれない。二日酔いに苦しむ羽目になってしまった場合の対処方法を知っておくのが得策だろう。そんな時には、「まず、よく休みましょう。二日酔いは脱水症状だ。自分の適量を守り、お酒と長く関係を築きたいものである。（早川結）

アート日和 美術展こらむ

日本の生物多様性とその保全

国立科学博物館（上野）
開催期間：開催中～7月19日
開催時間：9時～17時
（毎週金曜日は20時まで）
入館は各閉館時刻の30分前まで）
休館日：毎週月曜日、6月22日～25日
（但し、7月19日は開館）
博物館ホームページ
http://www.kahaku.go.jp/index.php

私達の将来を考える際のキーワード、「生物多様性」。これは生物種の多さと、それらによって成り立っている生態系の豊かさが保たれた状態を指す。地球上では多種の生物が生活し、互いに支え合っている。草を食べる昆虫、昆虫を食べる鳥、鳥を食べる動物、そして人。私達は、このような食物連鎖の繋がりの中で生活しているのだ。だが現在、この関係の崩壊が危惧されている。本展では、パネルや標本、映像資料などを通して日本での固有種減少の現状や、それに対する取り組みを学べる。

展示ブースに入ると、まずトキの剥製に目を奪われた。日本のトキは絶滅したが、現在は中国から譲り受けて国内での野生復帰を目指している。そこで、生物多様性保全のシンボル的存在として扱われているが、トキも多様な生物の繋がりの中で生きている。つまり、トキの保護を通して、それを取り巻く自然環境をも健全なものにすることが重要なのだ。

生態系の規模で生物多様性が維持されている環境の1例として、里山が紹介されている。里山では林や果樹園、水田や畑など、色々な生物にとって暮らしやすい環境が整えられている。将来も人間が他の生物と共生していくために、里山は1つの鍵となるだろう。また、東京の中心にあるにもかかわらず生物多様性が保持されている、皇居も取り上げられた。開発や環境破壊を免れた地という、皇居の意外な側面を知ることが出来る。

日頃耳にする環境問題という言葉からは、地球温暖化などを連想するかもしれない。しかし、それによる影響を考えた時、生物の減少問題に行き着くはずだ。高度経済成長期や近年の都市開発などを経て、私達の生活は便利なものになった。その一方で自然は破壊され、他の生物にとっての住処や餌は減少している。展示からは、そんな現実も垣間見えた。

ちなみに、生物多様性についての催しは、7月10日から同館で行われる「大雑乳類展―海のなかまたち」などでも引き続き開催される。是非、この機会を利用して、地球環境についての考えを改めてはいかがだろうか。（福井麻斗）

生物のこれからを考える

トキの減少も氷山の一角に過ぎない

CAMPUS GUIDE

●音楽部
「日白音楽祭2010」
日時：6月5日（土）
開場　14時
開演　14時30分
場所：百周年記念会館
料金：無料
内容：アンドリュー・ロイド・ウェバー作曲「オペラ座の怪人」ヘンデル作曲「ハレルヤ」　など
1年生の初舞台♪
合唱、オーケストラなど楽しいプログラムとなっております。
お気軽にお越しください！

●能楽研究会
「宝春会」
日時：6月6日（日）
開演　10時
場所：銀杏能楽堂
料金：無料
内容：古き良き伝統芸能を今に伝えるサークルです。
今回は、1年生にとって初めての舞台となります。謡と任舞を宝春流と宝生の二つの流派で行います。
無料でご覧いただけます。
是非お越しください！

●写真部
「六月展」
日時：6月17日（木）～19日（土）
場所：軸に会館3階
料金：無料
内容：現役部員による写真展です。新入生にとっては初めての写真展となります。皆様のご来場を、お待ちしております。

地学研究会

興味のある方は気軽に見学にいらしてください！

<活動日>　火曜日 18：10～　西1－101
<部室>　黎明会館 520
<HP>　http://gk-chigaku.hp.infoseek.co.jp/index.htm

Gakushuin Music Club ～Mejiro Music Festival～ 2010

Date…Saturday,5th June

Time…14:30 [Doors Open…14:00]

Hall…100th Anniversary Memorial Hall

Program…Andrew Lloyd Webber : THE PHANTOM OF THE OPERA,
George Frideric Handel: HALLELUJAH　etc…

Fee…Free

企画　早川　結
構成　深田　杏
レイアウト　深澤　知代
取材　大久保吉章　菅家　優　福井　麻斗　増山　詩織　松江　祐実

全勝でリーグ戦優勝果たす

卓球部男子

集中力切らさず栄光掴む

5月16日、千葉大学西千葉キャンパスにて、春季関東学生4部卓球リーグ戦の2日目が行われた。今回の対戦相手は横浜国立大である。いずれの試合も接戦となり、決着は第5試合まで持ち越しとなった。勝敗の行方を託された清水主将は見事勝利を収め、3—2のスコアで、本学がおよそ3時間にも渡る長期戦を制した。

本学は前日の千葉大と明治学院大、そして午前中の第1試合で東京都市大に勝利し、勢いに乗っている。試合前、清水浩希主将（営3）は「この試合に備え、横浜国立大と他校との練習試合のビデオを見て、研究してきました」と語った。

本学の主力として勝利に貢献した高塚選手（右）

先鋒を任された高塚洋向選手（哲1）は、1年生にして本学のエース格である。一方横国大も、初戦にエースを登場させた。序盤から相手の強打が炸裂し、1セット目を先取されてしまう。しかし、調子が出てきたのか次々に速攻を決め、2・3セットを連取した。そして4セット目、最初は相手の連続ミスによってリードするが、すぐに追い付かれてしまう。その後、激しい打ち合いとなるが、お互い1歩も譲らず、デュースへと突入。息詰まる試合展開となったが、最後は相手のミスでこのセットを取り、3—1で勝ちを収めた。

続いて第2試合には、稲川直也選手（化3）が登場した。対する横国大の選手は、カットを主体としたプレースタイルである。稲川選手は相手のキレのあるカットに苦しめられ、1セット目を大差で落としてしまう。しかし次のセットからはプレーを修正し、ミスを減らした。相手もしぶとく食い下がり、試合は最終セットまでもつれ込む。惜しくも稲川選手は敗れてしまったが、見応えのある勝負であった。

第3試合はダブルスである。本学でコンビを組むのは、1試合目に出た高塚選手と、早川翼選手（化2）だ。両チームとも強打を持ち味としており、激しい攻防が展開される。終始に渡って攻撃を畳み掛けた本学チームが相手の上を行き、3—1で勝利した。

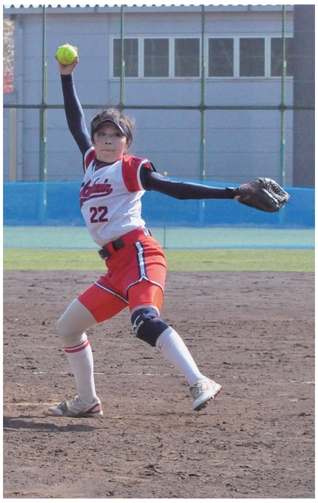
第4試合は、ダブルスで出場した早川選手がそのまま連続して戦った。1セット目は中盤までリードしていたが、相手の連続サービスエースによって追い付かれる。そのままデュースへと突入し、ゲームを奪われてしまった。第2・3セットは早川選手のドライブやブロックが冴え、点差を付けて相手を下した。このまま勢いに乗るかと思われたが、逆に第4・5セットは主導権を握られてしまう。本学は一度タイムを取って出直しを図ったが、最後に連続して強打を決められ、2—3で惜敗した。

2勝2敗で迎えた第5試合、皆が見守る中、清水主将が進み出る。横国大に勝つには、何としてもこの試合に勝たなくてはならない。フォアハンドの強打と、的確なバックハンドで得点を積み重ねていく清水主将。2セット目こそ相手に取られてしまったが、ほぼ安定した試合運びで勝利する。結果、3—2で本学が接戦をものにした。

今回の試合を「勝算は五分五分でしたが、勝ててほっとしました。1試合目で、高塚選手が相手のエースに勝てたのが大きかったですね」と振り返る清水主将。本学は次に行われた創価大戦も勝利し、ブロックでの優勝を決めた。今後も、選手達には更なる高みを目指して、精進していってほしい。（内田哲郎）

打線繋がり快勝

ソフトボール部女子



見事な投球で七回を１失点に抑えた源田投手

4月25日、中央大学軟式野球場にて春季リーグの初戦、対成蹊大戦が行われた。今後、波に乗っていくためにもこの1戦は落とせない。試合前に、前田華那主将（英4）は「ミスを恐れず積極的にプレーしたいです。また、ミスをしてしまった人をフォロー出来るような雰囲気を作りたいですね」と話してくれた。

初回、表の攻撃で1点を先制された本学は、先頭の川上真美選手（政4）が内野安打で塁に出る。すると、続く藤田彩加選手（独4）と五反田裕子選手（政4）が安打で続き、無死満塁のチャンスを作った。ここで、4番の源田祐子選手（心4）に打順が回る。1ストライク、1ボールからの3球目を振り抜くと打球はセンターへ。2点適時打となるクリーンヒットを放つ。その後も、本学は相手のエラーなどで1点を追加し、3—1とリードした状態で初回を終えた。

一回に1点を許してしまった本学だが、その後の守りは圧巻だった。先程逆転の適時安打を放った源田投手のピッチングが冴える。しなやかなフォームから投じられる切れの良い直球に加え、変化球などの緩急を付けた投球で、凡打と三振の山を築いた。

打者1巡して始まった二回裏、先頭打者が出塁すると、送りバントで確実にランナーを進める。難なく作り出した一死三塁のチャンスで五反田選手がきっちり走者を返し、徐々に点差を広げていく。三回にも同様の展開で、下位打線が1点を追加した。

4点差で迎えた四回裏の攻撃。一死から源田選手が安打で塁に出ると、5番の前田主将が打席に立つ。初球、パスボールで走者を二塁に進めると、続く2球目を叩いた。右中間へ上がった飛球は、ライトとセンターの間を抜けていく。これが三塁打となり1点を奪う。次打者の瀧澤麻衣子選手（日3）も、左前適時打で続く。松下萌美選手（哲4）の三塁打などもあり、結局この回は安打6本で4点を加えた。五回表の守備では、先頭打者に遊撃への内野安打を許す。しかし、本学バッテリーは冷静だった。後続をきっちり断ち、1—9のコールド勝ちを収めた。

試合を終えて、前田主将は「先頭打者が塁に出てバントで繋ぐ、本学が得意とする攻撃が出来ましたね。ただ、サインを見落としたりと平凡なミスが目立ってしまったので、修正していきたいです」と語る。また「リーグ最終日に向けて1週間頑張っていきます」とコメントを残してくれた。目標に向けて全力で進んでいく彼女達の今後に期待したい。（石井康祐）

執念の勝利

バスケットボール部男子

5月16日、獨協大学にて、第50回関東大学バスケットボール新人戦、予選トーナメントが行われた。対戦相手は聖学院大である。

本学は試合開始早々、相手にフリースローからの先制を許してしまう。だがその直後に、大島龍秀選手（政2）がドリブルで中央を突破し、初得点を挙げて流れを作った。その後、35—23とリードした形で第2クオーターに入る。本学は、橋本博信主将（数2）と大島選手を中心に点を重ねる。しかし、相手の攻撃が激しくなり、失点を許してしまう。前半終了時には、4点差まで迫られた。

後半も引き続き、双方が力強い攻防を展開する。最終クオーターの1分が経過したところで、立て続けにシュートを成功させ、一気に本学の優勢となる。だが、残り2分の時点で、僅かな間に11点と大量の失点を重ね、同点に追い付かれてしまう。

攻守共に活躍した橋本選手（左）

そのまま試合は延長戦へと突入した。本学は開始1分の間に3本ものシュートを決め、流れを引き寄せるも、再び点を奪われる。しかし、試合終了間近の同点の場面で、フリースローを獲得。これを橋本主将が落ち着いて成功させた。その勢いに乗って、大島選手、山口周一選手（政1）が追加点を入れ、勝負を決める。そして試合終了のブザーが鳴り、本学は99—94で勝利を収めた。

試合後、橋本主将は「勝てて良かったです。このメンバーで行う初めての試合だったので、まず勝つことを優先していました」と笑顔で語ってくれた。本選出場まであと2勝の本学。これからの試合も、チーム一丸となって勝ち進んでもらいたい。（榎本元気）

FLASH BACK

フェンシング部女子

永松 未千留 主将（英４）

躍進支える部員の結束

好奇心は、時に新しい道を切り開く。永松さんのフェンシングとの出会いは、ふとした興味がもたらした。高校まで文化部に所属していた永松さんは、友人の誘いでフェンシング部への入部を決意する。

運動部へと身を投じ、1年生の10月、晴れて迎えたデビュー戦は、余りにあっけなく終わった。開始早々に相手にポイントを連取され、惨敗を喫してしまったのだ。「時間にして10秒程という、極めて短い時間でしたが、得たものは大きかったです。何もしない試合よりも、力を尽くした敗戦の方が得るものは多いと実感しました」。この教訓をバネに、1歩1歩実力を付けてきたのである。

そんな地道な努力が結果となって現われたのは、2年生の時の関東大会だった。何と、その大会のベスト8まで上り詰めたのだ。この結果は本人も予想だにしなかったという。防御を基本軸にした試合展開を得意とする永松さんは、この大会の準々決勝でも手堅く点を稼いでいた。しかし、相手に隙を突かれ、逆転を許してしまう。その時に脳裏に浮かんだのは、これまでの試合の教訓だった。夢中で繰り出した剣で見事に相手を捉え、同点とする。更にポイントを加え、見事勝利を収めた。試合の勝因に、永松さんは部員の応援を挙げる。共に競技を続け、支え合う「仲間」を大事にすること。これが永松さんが一貫して持ち続けてきたポリシーであり、試合での強さの秘訣でもある。

3年生になり、主将に就任した彼女を支えたのは、彼女自身の人望であった。まず胸に秘めた決意は、退部者を出さないということ。「厳しいだけではつまらないですし、競技を楽しまないと試合にも勝てませんから」と語る。そのお陰か、大学のフェンシング部にしては珍しい程の大所帯だ。それが巡り巡って試合で力となる。それは彼女のような包容力のある人柄だからこそなせる技だ。

引退を6月に控えた現在は、新入生の指導に明け暮れているという彼女。その教えはフェンシング部の後輩からまたその後輩へと、連綿と受け継がれていくに違いない。（関根一馬）

強打に屈する

バレーボール部男子

5月4日、東京経済大学100周年記念館にて、春季関東大学男子4部バレーリーグ戦、対上智大戦が行われた。試合前に梶原翔太主将（政4）は「強いサーブで相手を崩していき、勝ってリーグ戦を締め括りたいです」と、力強く語ってくれた。

第1セットは本学が先手を取る。吉田博貴選手（済4）のライトからのスパイクと、センターの児島敬人選手（営4）の速攻を絡めた攻撃で、点数を重ねた。高坂琢也選手（化3）も見事なトスワークで相手を翻弄していく。しかし、中盤になるとスパイクが連続でブロックされるなどして、11—13と逆転されてしまう。その後は一進一退の攻防となり、終盤に入っても互いにサイドアウトを繰り返す展開に。だが、最後に粘ることが出来ず、27—29という僅差でこのセットを落としてしまった。

角度あるスパイクを打ちこむ藤田選手（右）

引き続き第2セットも、初めは本学が優位に試合を進めていく。好レシーブから、レフトの藤田友明選手（営4）が次々とスパイクを決めて、4—1とリードした。しかし第1セットと同様、中盤に連続得点を許す。更に点差を詰められると、6—7と逆転される。本学はタイムアウトで嫌な流れを切ろうとするが、クイックやレフトからの攻撃でブロックが振られてしまう。また、サーブミスなどで自分達のリズムに持ち込んでいくことが出来ない。要所で藤田選手がスパイクを落ち着いて決めていくも、このセットも18—25で落とす。

第3セットは上智大の一方的展開となった。相手の鋭いジャンピングサーブによって、4—3から5連続失点を喫してしまう。本学は吉田選手や藤田選手を中心に攻めるも、高いブロックに阻まれる。また、相手選手の打点の高いバックアタックなどを、なかなか拾うことが出来ない。結果、12—25という大差でこのセットを失い、本学はセットカウント0—3でストレート負けとなった。

試合後に、梶原主将は「本学のサーブミスもあり、流れをこちらに引き寄せられませんでした。また、粘り強いプレーが出来なかったように思います。完全に力負けです」と述べた。本学は今回のリーグ通算の成績で、3部へ昇格を決めている。今試合の反省を胸に、3部での戦いに挑んでほしい。（板垣亮平）

TOPICS

その他の試合結果

【フェンシング部男子】▼関東学生フェンシングリーグ戦▽フルーレ　2部　4位▽サーブル　2部　3位▽エペ　3部　1位

【硬式野球部】▼東都大学野球春季リーグ戦▽対上智大　9—6　勝ち

【航空部】▼第50回全日本学生グライダー競技選手権大会▽個人12位　団体11位

【サッカー部】▼東京都大学サッカー春季トーナメント戦▽3回戦敗退

【ゴルフ部】▼関東アマチュアゴルフ選手権予選▽1次予選通過

【馬術部】▼対慶応義塾大学馬術定期戦▽勝ち

【アーチェリー部】▼関東学生アーチェリーリーグ第5戦▽男子　対拓殖大　負け▽女子　対立教大　負け

【陸上競技部】▼四大学対抗陸上選手権▽第2位

デスクの片隅

人が集まって1つのものを作り上げようとすると、各々の性格が顕著になる。それは、我が新聞社も同様だ▼私も大学祭号編集の際、仕事を1人で進めないで情報を共有してほしいと言われたことがある。確かに当時の私は、何でも単独で行う方が早いと考えがちであった。だからこそ、この意見を大切にし、改善しなければと努力したことを覚えている▼だが、言われた方は気楽なものだ。指摘された点を意識し成長すれば良いのだから。本当に大変なのは注意した方である。人に求めるからには、自分も当然それを実践しなければならない。過去の発言に対しては、責任を持つべきなのである。そうでなければ「人に厳しく、自分に甘く」と評価されることは避けられないであろう▼しかし、何も言わずに我関せずの希薄な関係では、何とも哀しい。私も同期や後輩に言った言葉を思い返し、自分を律していこう。発言の責務を恐れず、いつまでもお互いを成長させる団体であってほしい。引退を前に、大学新聞社の未来を思った。（猫）